

修士論文要旨

曾我量深における真宗の体験的理解

加 藤 智 海

目 次

序 論

本 論

第1章 曾我量深における真宗の世界観——感應道交の思想

第1節 象徴世界観

第1項 莊嚴＝象徴

第2項 実体的世界観

第2節 宿業本能論

第1項 宿業＝本能

第2項 宿業本能のはたらき——曾我量深における大自然について

第3項 感應道交する具体的本能

第3節 感應道交について

第1項 感應道交の用例

第2項 聖徳太子の教学

第3項 感應の起源

第4節 曾我量深における感應道交の思想

第1項 機法一体

第2項 感應の事実

第3項 生命の象徴

第5節 まとめ

第2章 傾聴について——ロジャーズと西光の論

第1節 傾聴について

第2節 カール・ロジャーズの理論

第1項 パーソナリティの変化に必要な・十分な条件

第2項 現象の記述

第3項 上述の理論に注意すべきこと

第3節 西光義敏の論

第4節 真宗カウンセリングの理論

第3章 体験的理解に向けて——傾聴の真宗的意義

第1節 ロジャーズの理論に前提される人間観

第2節 西光における真宗の人間観

第3節 傾聴の真宗的意義について

第1項 ロジャーズの理論の妥当性

第2項 実習をふまえて

第3項 曾我量深の思想による傾聴の真宗的意義付け

結 論

【要 旨】

本論文は曾我量深における真宗の体験的理解について考察するものである。

目次に沿ってその概略を示せば、第1章にて曾我の真宗の世界観を、とりわけ感応道交の思想を主に概観し、そして第2章ではカウンセリングについてカール・ロジャーズと西光義敏の理論を採り上げ、私の実践活動であった傾聴の理論的意味を把握し、真宗との接点を模索する。最後に第3章では傾聴の真宗における意義を曾我量深の思想を基に考察する。以下にその要旨を記す。

曾我量深は、仏教の教えを自身に明瞭なものとするため、生きた教えとしていただくために、仏教の言葉を現代的な意義をもつものとして現代語に翻訳することを自己の問題としていた。こうした曾我の問題意識から古い死んだ言葉であった「宿業」が、現代において生きた意味を持つ「本能」という言葉に翻訳され、実感的な意味を持つものとなった。しかし曾我は、「本能」の語を通常理解されているような意味において用いるのではない。一般的に「本能」と言えば、動物的本能や欲望の本能といった、人間的尊厳の根拠となる理性に対立するものと考えられる。曾我はこうした一般的に理解されている「本能」は「真の本能」ではないと批判する。それでは真の本能とは何であろうか。

曾我によれば、仏教の世界観は象徴世界観であり、それは世間一般で求められるところの世界観、すなわち実体的世界観と対照的なものである。実体的世界観においては、理性によって分析抽象されたある種の理想が実体的に求められる。一般的に言われる「本能」は、この実体的世界観に基づくものであり、それは人間が動物とは異なることを理性によって証明するために考え出されたものなのである。これに対し曾我の言う「本能」は象徴世界観において見出される「本能」である。象徴世界観は、ものを観念的にみないで具体的にみていく世界観とされる。曾我は、感覚的事実である「国土」は、感覚されたその「国土」自体を指し示すのではなく、その感覚する主体としての本能を指し示すものだと言う。事実、感覚する「国土」は具体的なものであり、この感覚する主体である本能もまた、具体的本能と呼ばれ、真の本能とされる。

この宿業本能に目覚めることで、究極の自己一致が得られるのではないだろうか。本能は、

人間にあらかじめ備わっているものであるが、この本能を理性に対する忌むべきもの、理性によって律すべきものとすれば、人間に生まれてきた以上、真実に自己一致することは到底かなわない。自己の内では理性と本能と矛盾してしまう。そしてその理性と矛盾するところの本能は、理性によって抽象化された本能なのである。このことを指して曾我は「自縄自縛の道」と言う。

更に曾我は、この宿業本能を感応道交するところの具体的本能であると述べる。山川草木、山河大地、日月星辰、親子兄弟、馬や犬といった、世界の事々物々に感応する。山は向こう側にあつて、しかし私に呼びかける。山を感じれば、山は山として私に応えるのである。曾我はこの感応の道理を象徴するものが南無阿弥陀仏の六字名号であると主張する。南無とたのむ衆生は、帰命するところに如来の呼びかけを感じ、この機の感覚に阿弥陀仏が応える。このように、南無阿弥陀仏は感応道交の道理で理解される。

発せられた言葉を、言外の意味の象徴として聞くという傾聴の姿勢は、曾我量深の感応道交の思想に通ずるものがあるように思われる。むしろ感応道交は傾聴に言われる共感、象徴的理解を包含してさらに深いのである。それは衆生の感に対する如来の応があるからである。また感応道交に際して述べられた「我が身一人のところに引き受ける」ということが示唆するのは、感応の事柄が自己の内部に止まるのではなく、接する他者へも、この他者もまた一人の自己として広がりを見せる「自信教人信」の感応の世界である。

宿業本能の自覚に立ち感応の世界を生きることをもって、曾我量深の真宗の体験的理解としたい。

【参考文献】

書籍

- 稲垣瑞剣『死の解決』百華苑 1959年
 西光義敏編『援助的人間関係』永田文昌堂 1988
 曾我量深『曾我量深選集』第5巻 彌生書房 1970
 曾我量深『曾我量深選集』第11巻 彌生書房 1972
 曾我量深『曾我量深講義集』第1巻 彌生書房 1977
 曾我量深『歎異抄聴記』真宗大谷派出版部 1999
 花山信勝訳『聖徳太子御製 勝鬘經義疏』岩波書店 2013
 花山信勝『聖徳太子文科経文 維摩經義疏 全訳』改訂版 岩波書店 1980
 H. カーシェンバウム V. L. ヘンダーソン編『ロジャーズ選集 (上)』誠信書房 2001
 L. クラーク『宇宙生成のエロス』うぶすな書院 2000

論文

- 雲山龍珠「無碍の大道」『浄土真宗名法話講話選集』第七巻 同朋舎 2004
 河合隼雄「いま、宗教とは」『仏教と夢』河合隼雄著作集第9巻 岩波書店 1994